



の苦しみは、殺される苦痛の比下はない。これがオウム教の教義である。信徒の感覚で、常識とは相反するこの見地に立脚すると、教団においては、殺人も救済になり得たのです。

この回答は、虫を殺すことさえ固く禁ずる教えを説かれ続けている。私には、意外なものだった。しかし従前の説法とは一転、この麻原は仏典を引用して、「殺人」を肯定したのです。そして、この救済としての殺人は、「ポア」と呼ばれるようになる。そして、この「ポア」は、そのとき麻原は、直ちにポアの実践を説いたわけではありませんが、心は弱く、最後は、「まあ、今日君たちも話したとおり、います。この説法に接して私も、強心で救済に臨まなければなりません。思いこみすれ、ポアを実行に移すことは想像さえできません。下した。

ただ、麻原の説法を終え、席を立ちながら言った言葉は、いつもでも私の心にまことわりつきまわった。「親迦牟尼でさえ救済できないのに、だまして捕えるなどというものは傲慢だ」と吐き棄てるように、私の回答も批判したからです。

その後、翌年四月までの約一年間、麻原は同トリーマと断続的に説くことになりました。仏典も引用したこの説法が、麻原による一連の「ウアジラヤ」の救済の始まりでした。そして、そのうちに、えに、この説法には、秘められた麻原の本心が透み出たのではありません。下しようか。

前述の弟子との回答において麻原は、出家して間もない三人を指名しました。このように新参者が指名されるのは、稀です。事実、そのとき指名されたのは五人は、すべて古参の大師でした。ですから、麻原には考えがあつた。この三人に回答を求めたはずですから。

この三人は、すべて理系であり、CSI (Cosmic Science Institute) の教団の科学班) のメンバーでした。私の次に指名された者は、東京大学理学部基礎科学科卒。その次は、防衛大学応用物理学科卒。端的に言うに、麻原は、この三人に、ウアジラヤの救済を実践させようという意図を以ていた。すなわち、理系の出家者に教団の武装化を指示しようとしていた。その下、理系の出家者に教団の武装化や社会に対する破壊的活動に携わらせ、CSIのメンバーを意図して、ウアジラヤの救済を説いていこうとするから、この説法以外の諸状況も考慮すると、麻原のその動機について、それ以外に解釈の余地はありません。

木一 成就とは、解脱、悟りを得ること。  
\*2 私以外の二人について、後に教団の武装化に同参した。ただ、武装化の目的と明らかにはされず、いまも指示を受けたと思われる。

以上のように一九八九年四月七日の説法は、ウアジラヤの救済に向けての一つの転換点といえます。ウアジラヤの救済は、出家者の背景として、前年一月一日以来獲得に乗り出した人員が出家してきたことによりあります。麻原においてウアジラヤの救済を意図して準備を開始した前年一月一日頃には、ウアジラヤの救済は、同救済のための出家者の拡充が達成されるのを待たないからでしょう。

また当時の状況として無視できないのは、宗教法人の認証の遅れについて、麻原が強い不満を抱いていたことと、ウアジラヤの事態によって救済活動に困難を感じたため、麻原はウアジラヤの救済への歩を進めた可能性があります。ウアジラヤは、救済に難い者に対して救済方法がわからず、宗教法人の認証を申請していません。宗教法人格も取得すれば、免税などの法的優遇措置が受けられるからです。

ところが、オウムは宗教法人格の条件を満たしていません。わらわすの親が代議士に選任して、ウアジラヤの息子の出家に反対する親が代議士に依頼して、東京都に対して圧力をかけているといわれていました。この件について、麻原が行動を先鋭化しました。麻原は激怒して、都庁・文化庁に対して示威行動を起こした。超える出家者を伴い、都庁・文化庁に対して示威行動を起こした。ほとです。

私も取り囲む中で、麻原は元検事の出家者に都庁の担当課長の尋問を指示し、この課長を吊るし上げにしました。気の毒な課長は、元検事の技に嵌められて失言を録音され、困惑の表情を浮かべたままいました。その後私も、静肅な都庁舎内でウアジラヤ・ベルの音を響かせながら、宗教法人の認証を求めた大声でシユプレヒコールを繰り返しました。

「<sup>3-1-5</sup>末法の世の救済を考えるならば、少なくとも一部の人間はどうか！ ウアジラヤの道を歩むければ、真理の流布はできない」と思わなければ！」

麻原は都庁・文化庁から富士山総本部道場に戻ると直ちに、出家者に対して説法を行い、両庁の対応を批判して、徴を飛ばしました。ウアジラヤの救済に疑問の声を上げる者は皆無でした。麻原は、説くウアジラヤの救済は、このようにウアジラヤの救済の説法、内容をエヌカ

\*1 この考え方は麻原固有のものではなく、ウアジラヤの遺話にも見られる。  
\*2 ウアジラヤ・ベルの修行で使う法具。ハンドベルのようなもの。  
\*3 末法とは、仏法が廃れ、衆生の救済が困難な時期。  
\*4 日ウアジラヤの教学システムの教本。収録の一九八九年四月二五日の説法より。

その後、麻原が説いたヴァジラヤーナの救済の教義は次のとおり  
下す。

オウム教の教義の見地からは、現代人は悪業を積んでいくために、  
三悪趣に転生するの必至である。さらには、悪業を積み過ぎる因  
るの下、真理（精神を高める教え）オウムの教義（と受容できる因  
も尽きており、通常の布教方法では救済されないことされてしまった。  
そのための麻原は、現代人とポアとして救済する必要があると説  
いたのです。ポアとは、麻原が救済の対象について、その生命を絶  
つことによって、カルマも皆負い、より幸福な世界に転生させる手段  
でした。また麻原は、武力を用いて地球上にオウムの国家を建設し、  
人々にオウムの教義を実践させることも説きました。

かくも非常識かつ非現実的な教えを信徒が受け入れ、さらに実行  
に移したことは、ついでに、理解に苦しめられるかもしれません。こ  
が今の教えは、信徒の日常的な経験と密接に結びついていて、  
まず、ヴァジラヤーナの救済の前提は、現代人が悪業を増大して  
三悪趣に転生することです。これは信徒にとつて明らかな事実  
でした。信徒の今の認識は、非信徒の方々の「エネルギー交換」の  
経験に基づいていました。私は前述のように、非信徒の方のカルマ  
が移ってくると感じました。後には、自身が三悪趣に転生する状態にな  
たことも示すヴァジラヤーナを見ました。今のために私は、現代人は悪  
業にまみれ、三悪趣への転生は避けられぬと思つていました。悪  
現代人の転生については出家後、私はより強い危機感を抱くよう  
になりました。教団から外出すると私は、カルマが以前に経験した  
このように、ほど強く、空間から自身に移ってくると感じた。から  
下す。今のため外から教団に戻ると、安心感さえ覚えませんでした。  
このように、麻原の説法を否定できなかった。今の現代人の救済は  
不可能との麻原の説法を否定できなかった。今の現代人の救済は

また、ポアも、信徒にとつては、リアリティのある教えとし  
た。ヴァジラヤーナの教義は始め、麻原が「神秘的な力」によつて、  
信徒を解脱・悟りに導く方法として説かれていました。この方法で  
は、麻原は信徒について、「苦しみ」を与えることによつて、カルマ  
も皆負い、解脱・悟りに導きました。  
つまり、麻原が信徒に「苦しみ」を与えることによつて、両者の  
間に「関係」が生じ、「エネルギー交換」が起こるわけです。今の  
とき、麻原の持つ最終解脱状態の情報に信徒に移り、また同時に、  
信徒のカルマが麻原に移ります。今の結果、信徒はカルマが浄化さ  
れ、解脱・悟りに導かれるのです。これが、今も今もヴァジラヤ

\*1 「カルマも皆負う」といって、第二章第二節三、四頁参照。  
\*2 ただ、麻原は一般出家者（側近でも武装化せず有下もい出家者）に却つては、ポ  
アを実行に移すことや武力を用いてオウムの国家を実現しようとしていたこと  
も、あくまで説かされたこと（今でも、当時、説法に接していた者は、麻原から連  
法行為を指示されることがよくあった）  
\*3 第二章第四節八、九頁参照。  
\*4 転生を悪くする影響を受けるといふ理由で、出家者は外部との接触を厳しく制限さ  
れてきた。このように、教団が外部の悪影響を警戒して来たことが暗示になり、教団  
から言われたことばかりの体験が現れたと考えられる。





悟りを認められたのです。落ちたようだと云われ、第二段階目の解脱。

以上のように信徒の日常に溶け込んでいた「エネルギー交換」と「カルマ落とし」の教義を基礎として、麻原は「アジラヤ」の救済の説法を展開しました。

このように、このままいくと地獄に落ちる人がいた。そしてそのカルマを見極めた者が、そこで少し痛めつけてあげて、その痛みの人は、それを知って痛めつけ、そしてポワサーした。つまり殺したわけだ。人間界へ生まれ変わると、これは善業だ。と認める。悪業だと認める。そして、観念的な善業は、法無きの理論も知らない者は、それをやれと見つけ、それがやると、二八日、富士山総本部道場）

ここで、地獄に落ちる人も、痛めつけてポワサーした。というのは、カルマ落としによる幸福な人間界に転生させたという意味です。

例えば、A君がB君を殴りつけたと。このとき、B君の今までの殺生などのカルマがA君に移行すると、やうすると、A君は、その暴力的になり、そして身体を痛め、解脱に耐える道筋が失われるようになります。例えば、A君がB君を罵倒したと。やうすると、今までのB君の口のカルマがA君に移行し、A君がアストラールはけられ、そして本当の意味での神聖な清らかな「アインフレーション」のマントラが唱えられ、やうと。しかし、この問題になると、A君がB君を罵倒し、やうな問題になると、A君の心の働きの中心にB君も本当に真理に目覚めてほし、A君の心の働きの実践をしてほし、という心があつたならば、例えば暴力を振るったり罵倒したり、A君の心は成熟する。あうと、もうらん、身体を痛めたり、あうはアストラールを

- \*1 第二段階目の解脱・悟りの基準は曖昧であり、麻原が信徒に煩悩・カルマの状態で見極めて判断するされた。前述のオレンジ色の巻について、第二段階目の解脱・悟りの際には、身体験された。
- \*2 教団が発行したテキストには「ポワサー」と記してあるが、麻原は「ポワ」と発音した。
- \*3 法無我とは、観念に捉われず、心で教える。
- \*4 本節において以下に引用する説法は、日「アジラヤ」ナコース教団システム教本に収録されている出家者向けのものである。
- \*5 「アストラール」は、潜在意識と結びついて、教義上の世界、音と関係が深い世界とされた。
- \*6 マントラとは、宗教的の意味を含む言葉。やう言葉を繰り返し唱え、精神に根付かせる。



痛めたり、ケガをしたりするかも知れない。しかし、少くとも心は成熟するであらうと。なぜならば、A君は自分の身はけがれると、例えは殴ると、この行為によつて自分の身のカルマはけがれると、例えは罵倒することによつて口のカルマはけがれると、例えは知つていふからである。知つていふのは頭の中で知つていふだけとやなくて、実際に経験していふからである。しかし、もしA君がここでB君に對してそれを行為として行なうれば、B君は地獄へ落ちてしまふだらうと。A君がそう考えたならば、これぞヴアジラヤリナである。 (一九八九年八月二〇日 富士山総本部道場)

この説法では、エネルギー交換による救済が説かれていきます。つまりA君は、エネルギー交換を起してB君のカルマを浄化し、B君が地獄に転生するのを防いだわけです。ここで、エネルギー交換を起すための「働きかけ」——あるいはカルマ落とし——はB君を殴ったり、罵倒したりするA君の行為です。

カルマをしようという行為そのものは成立するといえるでしょう。

〇〇に對してヴアジラヤリナのサンゲを十四時間やらせたことがある。このときにわたしは二時間指導をした。そして、そのうちの一時間はほとんど竹刀で一杯お尻を殴りつけるという作業を繰り返した。彼女はほとんど蓮華座を組むこともできず、そして詞章を読むこともできなかった。泣き続けた。

ところが、三回目からは——三回目から四時間に落ちて、四時間集中し続け、ヴアジラヤリナのサンゲを続けた。そして、わたしはとうとう「たか」といふと、叩いた後、そのまま内熱が出た。内熱というものは、ナイゲイリに結まらがり、起きる生ずるものだが、——その熱によつて一日苦しんだ。しかし、まあ今まだ少し残つてはいるけれども、マントウ瞑想、あるいは思索をする。このように、抜け出すことができた。このように、カルマがわたしの移ったんだというのだ。このように、カルマの實體として、その状態を自分の中で体得すること、カルマの實體というものは救済するに救済するに、持ったことができない。何をいふに、これは救済すべきか、という実感を持った。このように、

★1 ヲアジラヤリナのサンゲとは、カルマを浄化するための修行法。自らの足を竹刀で叩きながら、麻痺やヴアジラヤリナの戒に帰依すること、マントウを唱えたり、過去世からの自身の行いを懺悔する詞章を唱えたりした。

★2 ナイゲイリとは、エネルギーが通る管、カルマは管に蓄積し、これを詰まらせることされた。第二章第二節一頁参照。

★3 その状態とは、受業による行為をしたとき、そのカルマがどのように返ってくるか、ということ。



この説法において麻原は、カルマを背負うという行為を自身の経験に基づいて説いていきます。麻原は、〇〇を竹刀で殴りつけたら管が詰まり、苦しんだと言います。つまり、〇〇を殴りつけたことにより、両者の間にエネルギーが交換が起き、〇〇のカルマが自身に移ったように感じられたのでしよう。一方殴られた〇〇は、できなかつた修行ができるようになりました。修行を妨げていた〇〇の悪い心、カルマが麻原に移った結果であるかのようです。以上の経験をもつて、〇〇のカルマも背負った結果であるかのようです。以上、信徒においても日常茶飯事で、たまたま幻覚的経験は、前述のように信徒におられるカルトの会員を非難したところ、尾底骨のあたりが詰まり、心身の不調を招きました。また逆に、麻原から叱責されたときは、麻原との間にエネルギーが交換が起き、自身もカルマが浄化されるのを感ずりました。

ですから一般的見地からは荒唐無稽な麻原のこの説法も、信徒にとりては自身の経験と合致してあり、道理にかなったものとして映ったのです。

また私がヴアジラヤーナの救済の教えを受容した背景には、この世の生命よりもよい転生を重視するオウムへの価値観に同化したこと、たまたまありでしよう。私はいわゆる幽体離脱などを経験したので、私たちの本質は肉体ではなく、肉体が滅んでも魂は転生を続けるという教義の世界で生きていたのです。

\*1 一般的には、麻原が説いた根拠のみでは、カルマを背負ったことを認められるものではない。しかし前述(第二章第四節九頁\*3)のように、信徒は自身の経験とカルマの法則を教義の現れとして、実感として、その経験が教義のコンテクストで意味付けされる状態に陥った。麻原のこの説法が十分な説得力を持つた。信徒はたまたま、身の上が悪いことが起ると、自身が過去に積んだ悪業が返ってきたものとして、絶対的、威嚇、それ以外に解釈はされないう状態に陥った。私が在家信徒時、吉祥寺で千うし配り中にカルト会員と話したとき、出来事、当時厳格な不殺生を説かれていたのに、殺人が行われる戦争は絶対悪と理解して

\*3 第二章第五頁\*2参照。  
\*4 幽体離脱とは、自身の肉体から離脱するようになり知覚する体験。